

日付の由来について

2021 年 2 月

日本でウイスキーが飲まれ始めたのは 1853 年、ペリー来航時と言われております。
開国後は、スコットランド、アイルランドなどからウイスキーの輸入も始まり、それを追うようにして、国内ではイミテーションウイスキーの生産が始まります。これは、酒精アルコールに着色、味付けを行ったもので、おおよそウイスキーと呼べる代物ではありませんでした。その製造者の中から、寿屋、摂津酒造といった国産の本格ウイスキーの製造を目指す人々があらわれます。

中心人物は寿屋（現サントリー）の鳥井信次郎氏と、摂津酒造の竹鶴政孝氏であり、その物語は 2014 年 9 月に放送が始まった NHK 連続テレビ小説「マッサン」でも語られております。摂津酒造がスコットランドに派遣したのが竹鶴氏であり、帰国後浪人となった氏を、技術責任者、初代工場長として迎え入れたのが寿屋です。

その後 1923 年に寿屋は山崎蒸溜所を設立し、1929 年には初の本格国産ウイスキー「サントリーウイスキー（通称“白札”）」を発売するに至ります。

この発売日が 4 月 1 日で、この日が記念日として最もふさわしいと考えます。

後に竹鶴氏は独立して、大日本果汁株式会社（現ニッカウイスキー）を設立し、北海道の余市で蒸溜所の操業を開始します。なお竹鶴氏がスコットランドで作成した実習報告書、いわゆる“竹鶴ノート”は摂津酒造の上司である岩井喜一郎氏の手に渡ります。岩井氏は本坊酒造の顧問として、石和蒸溜所の設立に携わりました。

1980 年代には国内に地ウイスキーブームが起こり、自社での蒸留を行う事業者も多くありましたが、1989 年の酒税法改正を契機にこのブームは終焉を迎えます。

2010 年代中頃からはクラフトウイスキー蒸留所の設立が相次ぎ、現在では 30 を超える蒸留所が国内で稼働しています。特に、ベンチャーウイスキー秩父蒸留所の活躍は、広く一般の方々にも知られていることと存じます。

現在、世界中で高い評価を受けているジャパニーズウイスキーの礎を築いた先人の偉業をたたえ、また、現在の生産者を応援することを目的とし、ジャパニーズウイスキーの日を記念日として制定いたします。

ジャパニーズウイスキーの日実行委員会 事務局